

来月の豊受大神宮遷宮祭「奉祝大祭」盛り上げ 東京農大生 みこし飾り付け

長和で「山村再生プロジェクト」



みこしの飾り付けを終えて記念写真に納まる学生ら

東京農業大学は、長和町を実習地に町などと連携して地域振興に役立てる取り組みを進める「山村再生プロジェクト」を行っている。21日には学生や卒業生ら16人が、来月行われる同町古町の豊受大神宮遷宮祭の奉祝大祭で繰り出すための同大みこしの飾り付けを行った。

伊勢神宮と同じ「式年遷宮祭」は20年に1度行っており、来月19日がご神体を改修した神殿に戻す遷宮斎行、20日は祝いの祭り。みこしは20日午前中に同プロジェクトの一環で長和に来訪する学生や

卒業生ら約20人が担ぐ予定。地域との交流の中で伝統文化や中山間地農業などにふれ、山村再生のアイデアを提案している同大の取り組みをアピールする。

飾り付けは立岩地区の消防団詰めで行い、同大のオリジナルグッズのうちわをみこしの屋根の四方に取り付けるなどした。

同大食料環境経済学科3年中の優月さん(21)は「遷宮そのものについても長和町に来るまで知らなかった。2月の実習で初めて知り、こうした伝統に関心が深まった。めったに経験できない機会を得たので、みこしを担ぐ時も参加したい」。卒業生で東京都内大学院で政治学を研究中の船津崇さん(26)は「出身地の福岡県行橋市では盆踊りもすたれ気味なのに、数百年という歴史を持ち、脈々と継承

されているのは素晴らしい」と話した。

同プロジェクトで学生らを指導する長和町古町出身の同学科、立岩寿一教授(60)は「40年前は高校を終えて上京していたため遷宮に接することができなかった。前回は家族と一緒に体験できた。学びを深めている時期に遷宮にふれられる学生たちには体験を役立ててほしい」と話した。

来月、学生たちは世界に類のない日本の祭り文化の神髄にふれる。

東京農大生の挑戦 in 長和町 ⑤ 山村に活力を

【長和町】農作業の筋目を迎える8月。各農家では、夏野菜の収穫や残渣処理とともに秋野菜の播種や土作りなどの準備が始まる。

8月実習では、先月収穫した小麦「ゆめかおり（強力粉）」でパン作りを行った。パンの種類はバターロールとハムパン。いわゆる菓子パンと総菜パンの2種類を試作食味した。参加した大学生は「この小麦の特徴であるモチモチ食感

を生かすのであれば、総菜パン向き。菓子パンだとしつこい」と話す。今後モカチ作りとして研究を予定している。

農作業ではソバの播種を行った。選定種は「高嶺ルビー」。景観作物として、タカノ（株）信州大学が共同開発した赤い花を咲かせるソバだ。観賞と食味が楽しめることに着目した。今回は種子採取用として試験栽培を行う。土作り

強い日差しの中での播種作業



では、小麦畑に牛ふん堆肥を投入。牛ふん堆肥は、長和町の循環型農

業の一環として取り組まれている（株）長門牧場の完熟堆肥を使用し



小麦「ゆめかおり」を材料にパン作り。初めての人が多く、地元の人に教わりながら一生懸命作った。また、土作りの意味として、牛ふんや麦わらといった有機質肥料の遲効性と化成肥料といった無機質肥料の速効性の違いや使用方法、それが作り出す団粒構造（土の質を高める）と微量要素を数値的に表すpHについても学んだ。

（長和町役場産業振興課農政係・尾美保）

目と口で楽しめる「高嶺ルビー」